

2026（令和8）年4月21日

高松高裁 控訴審 意見陳述

控訴人 須藤昭男

私は、控訴人の須藤昭男といたします。

高松高等裁判所で控訴人陳述の機会を与えて頂き感謝しております。

私は福島県の会津地方の出身です。福島第一原発から約100キロ、農林業の家庭で育ちました。52年前から現在まで牧師として松山市に住んでいます。

2011年3月11日、故郷福島を襲った東日本大震災がおきたのです。

テレビから流れる恐ろしい映像、東北訛りの叫び声、原発から上がった爆発の雲、なにが起きているのか想像もつきませんでした。

事実は、3月12日に1号機のメルトダウンと水素爆発。2号機もメルトダウン。14日には3号機メルトダウンと水素爆発。15日には4号機が水素爆発。

東日本壊滅の一手手前の大事故でした。

福島県は、東京電力福島第一原発から2キロ圏内の住民に避難命令を出しました。しかし、2キロが10キロ、10キロは20キロと拡大し大混乱の中に人々は避難してゆくのです。

私はこの裁判になって福島県の避難者に質問しました。その方は、あの事故の時、当初何が起きたのか見当がつかなかったそうです。東京電力は、「原発は、絶対に安全です。」「原発は五重の壁で護られていますから安全です。」と、現地住民に繰り返し説明し続けていました。そのため、事故など考えられなかったというのです。

壮絶な避難と避難生活の中で起こった悲しいことは、語り尽くすことができません。特に原発に近かった請戸地区での悲劇。津波で家屋が倒壊、救助に行こうとしても、放射能にさえぎられて行けない。「助けてくれ、助けてくれ」という声が聞こえるのに、行けなかったのです。

大熊町双葉病院の避難の際は、入院の患者さま方、車椅子、認知症の患者様へ襲い掛かる放射能。医療関係の方々の必死の努力も空しく多くの方々が命を落とされました。

避難先での慣れない生活。無理解のゆえのいじめ。「原発さえなければ」と書置きして世を去った人。悲しい事実はあまりにも多いのです。過去のことだけではありません。今も起こ

り続けています。終わりが見えません。

極めて深刻な現在進行中の問題は、青年たちを蝕んでいる甲状腺ガンの問題です。2011年原発事故当時、福島県に住んでいた18歳以下の子供38万人を対象に、被曝により発症の可能性のある「甲状腺ガン」の検査をしています。その結果、2021年6月末までに約300人が甲状腺ガン、またはガンの疑いがあると診断されました。甲状腺ガンは年間100万人に1人～2人しか発生しない希少なガンなのです。明らかに多発しています。今も増え続ける中に、公にできないで悲しんでいる人々があるのです。

報じられない深刻な女性の方々の苦闘もあります。若年層（15歳～24歳）の福島県外への流失が多いのです。口にされない中での偏見、差別があるのも事実であり、若い女性たちの不安を駆り立てているのです。

加えて極めて深刻な問題は、先が見えない廃炉問題です。

福島原発1号機から3号機が炉心溶融を起こし、その内部には推計880トンものデブリが残っているのです。

上皇后 美智子様は

帰りえぬ 故郷をもつ ひとらありて 何もて 復興と 云うやをしらず
(帰り得ぬ故郷を持つ人らありて 何もて復興と云ふやを知らず)

と詠っておられます。

この裁判になって私は、JR双葉駅にゆきました。実に素晴らしい駅舎とその周辺です。しかし車で数分も走らないうちに目にしたのは、荒涼とした光景、校舎らしい建物、病院、崩れかけた家屋などなど。「これが現実ですよ、なにが復興だ。」とつぶやいた友人の言葉が耳からはなれません。

2023年12月福島県の発表によると

◇県内外への避難者数 26、604人

◇直接死・関連死者数 3、945人

◇悲しいことに自殺者数 119人 の数字が厳然とあるのです。

知人も悲しく厳しい短歌をくれました。

来て見れば竹馬の友は避難先 夏草しげる門口にたつ

あれから 15 年の歳月が経過しました。

新聞に故郷に帰還した方の投稿がありました。「…夕暮れ時、時々思う。帰ってこなければよかったのかな、と。被災地の現状は悲惨だ。復興には程遠く、復旧の見通しさえ立っていない所もある。巨額の予算をつぎ込み、新事業を始めることだけが復興ではない。住民がいなければどうにもならない。」との投稿でした。

四国に、愛媛に、福島原発事故の悲劇を繰り返してならないのです。

日本一長いといわれる佐田岬半島の付け根にある伊方原発です。

地震国日本です。中央構造線の問題。事故が起きた時の半島住民の避難の問題。原発が事故を起こし、道路が全く損傷無し、という状態であったとしても、避難者は原子力発電所の近くを通過して松山方面に避難することになります。3号機の中心から国道まで1キロしかありません。放射能を浴びない避難などできないことは、素人でもわかります。

地震による被害の場合は明白です。三崎半島に生まれ育ち消防団員をされている方は、こうおっしゃっています。「私は地元建設会社で働いていたとき、町道県道の復旧工事をした経験があります。地震被害が起きれば、道路が損傷します。落石、倒木、崩落などで避難誘導は困難です。祖父母は急斜面の通路を歩くことができません。祖父母を病院につれてゆくときには、家から道路まで背負っていました。」と。

伊方原発に事故がおこれば瀬戸内海は死の海となり、美しい自然と文化の四国は壊滅的な打撃を受けます。

司法の義は、何にも代えがたい、地球より重い一人の命を護ることではないでしょうか。故郷福島の東京電力福島第一原発の事故では、申しあげましたように多くの命が失われ、先祖から受け継いだ土地財産を失ったのです。

伊方原発にも同じ危険性があるのです。尊い一人の命、地球よりも重い一人の命を守るといふ司法の立場から、伊方原発の運転を差し止めていただくことを切に願い、私の意見陳述といたします。ありがとうございました。